

研究課題三つ

島山正光

(1) 白鳥の食性

白鳥の食性については各方面の方々がいろいろと申しておられる。いずれも本当の事のようなのである。しかし、範囲を基だしくせまく見ておられるし、実際に投与観察しての結果であるとは信じがたい。

さて、白鳥はアマモ、コアマモ、水生昆虫等を食すと教えられてきたが、これもまったく間違いではない。では魚貝類は絶対に食べないかというところでもない。与えつづけているとホタテやその他の貝類も食べるようになる。死体解剖して「貝類があった、魚が残っておった。」というのも間違いでもいつわりでもない。しかし、あくまでも草食の鳥であって、そのような例もあるということである。いろいろな草を食べるということを知ることを得たのは、現在の方が多いが、過去において永い間接しておったからこそ知ることを得たものと思う。20年位になると思うが、三上先生に陸草も食うことを話したことがある。

私は34年に餌付に成功する以前に、海草を食べるということを知った。さらにその前に陸草を食べるということも知っていた。

白鳥の食する陸海草名は後で申し上げることとする。傷病鳥を飼養して知ったことであるが、雑草の根を食べると同時に相当量の土を食べる。砂嚢の中に消化に必要な砂をたくわえる必要上、池の縁の草を食べると同時に土も食い荒らすものと思っておったが、そればかりではない。池の中に小島が二つあり、7・8m位の半島もあるが、池の拡張工事と同時に半島も段々と細ってくるほどに喰ってのけた。見ていると一生懸命に土を喰っている。そこでこまりはて、少しでもその用に供すべく私は箱に砂を入れて、その上に餌を入れてやっているが、これをきれいに喰ったうえで、なおかつ土を食べることを止めない。黒ボク、赤土といわず粘土も食う。このことは今回の経験によって知ることを得たが理由はわからない。冬期間は飼養されているものは雑草も海草も取ることはできない。そこで私は海草は乾燥して、陸草は塩漬けとして保存した。しかし、これは逆の方がよかったかも知れない。よく考えてやったことでもなく何となくこんなことになったのである。海のものは塩蔵とし、陸草は乾草とした方が理に合ったかも知れない。皆さんもご承知の如く白鳥の糞は黒い。あれは草や海草を食べるからである。

トウモロコシやパン類だけの餌のときは糞は白っぽくなったり、水様性の不健康便のようになる。これはニューキャスル、白痢のような病気のためではなく餌が原因である。塩蔵や乾草を与える前に水槽に入れて与えるのであるが、塩漬けの方は塩抜きとなり、乾草の方はフヤカス役目を果たすからである。この陸海草は春から秋にかけて食したものであるから私は自信があるが、塩漬や乾燥にすること自体が研究課題であった。しかし、ここでこまったことができた。時期が時期だけに寒さのため水が氷って白鳥が食べられないのである。そこで寒冷厳冬期だけ各家庭やスーパーで捨てる野菜をもらい受けて与えることとした。しかし、漬け込んだ草類を秋に極短期間試みに与えてみたが、争って食うのを確認している。現在は保存した草類と野菜をまぜて与えているが、直径60cm位のセンチクダライに一杯を7羽でからにしている。これは毎日である。

- 海草類では アマモ コアマモ アオサ アナアオサ ボ-アオサ ボ-アオノリ
- 水生昆虫類では テッポウエビ アナジャゴ ニホンシナモグリ
- 陸草では アゼシゲ ヨシの根と葉 スギナ ボク草 ナガハグサ カモカヤ(オオチャ-
トグラス) ハイコヌカグサ イグサ
- 野菜では ハクサイ キャベツ レタス カリフラワー ナノハナ 大根の葉

私の経験ではミカンの皮と人参、たまねぎは食わなかった。この他に福島の野鳥の会か、白鳥の会かではヤナギモを養殖して白鳥に与える計画とか聞いている。白鳥の食用となる草類はこれだけではなく、まだ種々多くのものがあると思う。しかし、私の経験したというか現在まで研究したものはこの位である。皆様からも教えを受けて参考にしたいと思う。

(2) 白鳥の白化

まず白鳥が白鳥となるための白化に関して申し上げる。白鳥が白鳥となるには他の鳥類、獣類、魚類とは根本から異なるようである。

幼鳥が成鳥となる過程において、まず脳下垂体のホルモンの分泌により灰色の毛が白化作用を起す。メラニン色素が減退し、遂次白化するものである。これは白鳥が本来の白鳥の姿に立ち帰るための白化であって、他の変色する鳥の雷鳥の類とは基だ異なるものである。しかし、白化するに際しては雷鳥も同一であるが、白化する場合に一枚、一本づつ羽根が落ちて白い羽根が生えかわるものではない。白鳥の場合には風切、雨をい、尾羽根等にあっては換羽するものがある。また、その他の羽根も時期的に換羽するが、しかし、それは病葉の散るに等しく数万分の何%かに過ぎない。

白化するに際しては、羽根の一部分から点々と白化して行くもので、トビ色の羽根が抜け落ちて白い羽根に生えかわるものではない。このことに疑問をいだかれるならば、渡来時から幼鳥をごらんになって確認していただければ得心がいかれると思う。

昨年2月中旬頃、私の入院中午後9時30分のラジオで「鳥獣の白化について」と題して、某大学教授と某公民館長の対談があるというので病床で期待して聞いたが、全然得るところなく残念に思った。雷鳥の白化と白鳥のそれとは違いがあることは先にも申し上げたが、獣類、魚類の白化変色(保護色)にも差があるようである。雷鳥の白化するのは四囲の状況に順応し、自らを守り、種族保存と繁栄のための持って生れた保護色である。獣類、魚類も大同小異であろう。しかし、白鳥はどうなのであろう。白鳥の生物学的特性について、我々は残念ながら持っている知識があまりにも貧弱である。

(3) 亜成鳥と繁殖率

さて、幼鳥の折には解剖しても雌雄の判別のつかないものもある。ここに亜成鳥という一課をもうけたことにより、甚だしく観察分類を複雑化したかに思う。亜成鳥という一課は分類学上是非とも必要なものであるかどうか、また亜成鳥とは如何なるものをさしているものか。

幼鳥と成鳥の間ということになると、人間に譬えていうならば「子供でもないが大人でもない、中

間人間とまで行かなくとも、いづれにも属さざるものとなる。」とは不可解である。亜成鳥と名付けたものは現在では50 m位はなれると双眼鏡でも見分けが困難であるほど白化している。このために成鳥何羽、幼鳥何羽と観察上実際とは誤差が生じる。幼鳥の場合には雌雄の判別の付かないものもあると申し上げたが、亜成鳥の場合にはどうか。発情が来るか、交尾は可能か、受胎はどうかというような問題が起きてくる。このいずれも可能であるとするならば、亜成鳥などとややこしい中間種ではなく、成鳥として取り扱うべきものと思うがどうか。

昨年小湊においての雌雄鑑別講習により、ある程度の自信を得られたことと思うが、結構な意義ある催しであったと思う。今年もさる3月8・9日の両日、標識着標時に鑑別を行なったが、過去3年間の内診鑑別によるとメスが大変に少なかった。しかし、私の鑑別未熟は自他ともに認むるところである。大形のツル、アホードリ、ダチョウも鳥の内であり、産卵数は1ないし2個という。白鳥の場合は6個と多量になっている。これほど産まなければメスの確保ができないという理由によるか、また白鳥もアホードリのように2年に1回、または3年に2回といった間欠的繁殖であるか。規則的繁殖ではあるが自然淘汰が特にはげしいが故に多産の必要があるか。ふ化が順調に行なわれておらないか。成鳥となっても翌年から繁殖するものではなく、何年か後になってやっと繁殖を初めるものであるのか、これは研究課題である。

小湊に渡来するものの中には5・6羽のヒナを連れてくるものもまれにはある。また標識鳥は、年数が浅いためであろうが、50年に着標したものは51年だけに見られ、51年に着標したものは52年度だけに見られた。50年度のもは1羽も渡来しておらない。今年渡来したものは51年渡来のものだけで1C15、1C20、21、22、25の5羽が渡来したが、1C21は首輪脱落し、足輪だけとなって帰って来た。これは小湊だけのことであろうか。

アホードリの場合には、ふ化までは65日前後、巣立までには140日前後であるが、白鳥の場合にはこれよりも早いと思う。私の経験では北緯56・7度附近になると午後11時頃に暗くなり、午前3時頃には明るくなる。日照時間は日本の倍位になる。したがって採餌時間が長いということになり、成長も早いということになる。アホードリの場合には白鳥と違い、離着陸場所の選定を要する。そのために巣立ちが遅いのではないか。

正確に個体群の動向を予測するためには、さらに繁殖成鳥の死亡率と補充率、つまり産卵後あるいは巣立ち後何割の個体が繁殖年齢に達するまで生き残るかということ、年齢構成なども明らかにされなければならない。日本白鳥の会という看板を掲げた以上は、真剣に取り組まなければならない時期にきているように思う。